HEART PLAZA YOSHIDA

特集　ひとり ひとりの「あたりまえ…」

今回の表紙　「リマ先生の夏休み工作講座」でマカロンなどの「フェイクスイーツキーホルダー（写真上）」を吉田町内の児童クラブのみんなと楽しく作りました。リマ先生（写真右）は 10 月末まで吉田人権会館に勤務されています。 連絡をいただければどなたでもフェイクスイーツキーホルダーの作り方を教えてもらえますよ。

吉田人権会館 ハートプラザよしだ　会館だより みおつくし

住所 吉田町常友 1284 番地 1　☎ 42ー2826　2016（平成 28）年 9 月 21 日発行

オバマ米大統領のヒロシマ訪問に思う

5月27日、テレビ中継を見ながら、オバマ氏の平和記念公園到着を今か、今かと待っていた。厳重な警備のなか車列が近づいてくる。それは、被爆者や多くの日本人が「あり得ないこと」と思いつつ、待ち望んでいた被爆地訪問、71年目の歴史的瞬間である。

「もっと早く来ていれば」の声は多いが、米国は戦後50年頃から、広島訪問を前向きに検討していたらしい。実現しなかったのは、日本外務省の反対が理由の一つである。

2009年には外務事務次官が駐日大使に「日本国民の期待を抑える必要がある。訪問は時期尚早だ」と主張していた（毎日新聞）とか。

また、「1944年、ルーズベルト米大統領とチャーチル英首相が、原子爆弾完成の暁には日本に使うことで一致した（ハイドパーク覚書）」とある。この史料だけでも原爆投下が「終戦を早める」論ではなく、日本は早くから実験の標的にされていたことが推測されるだろう。

原爆資料館では複数の特設展示を見た後、「サダコの折り鶴」をしゃがみこんで、目線の高さで見学し、自ら持参した折り鶴を供えたといわれる。また、子ども達にも平和の象徴としての折り鶴を手渡した心使いには未来志向の人間的優しさが感じられよう。

原爆慰霊碑前に花輪を手向け、5秒間、目を閉じて犠牲者を追悼した。格調高い約17分間のスピーチには「核兵器なき世界」への目標を掲げ、その実現のためにたゆまぬ努力を「積み重ねること」を内外に示唆したものと受け止められる。

ヒロシマ訪問の意義

オバマ氏だからこそ実現した訪問、5秒間の黙祷には様々な思いが感じられた。それは被爆者との対面や交流の態度にも表われていた。

温和な笑顔で歩み寄り、握手し、抱擁までしたとき、リベラルで平和を希求する姿勢を感じた。

「罪のない命」を追悼するだけでなく、平和のために核戦争の可能性を減らすことを世界に発信し「核なき世界」への扉をノックした歴史的瞬間と言えよう。

核兵器による人類滅亡を防ぐのは被爆国の使命とも言える。日本の戦後70年は平和国家として、経済の復興と国民の健康や福祉政策を推進し「安全・安心の国づくり」をすることができた。この平和路線を大切に、自然災害をはじめ原発事故や核被害の問題などにも、よそごとではなく、自分との関わり、「どう向き合えばよいか」が問いかけられている。

（春日人権相談員）

（写真上）相談員が撮影した原爆ドームの写真。（写真右）原稿を執筆中の春日人権相談員。

【編集後記】

特集の取材を通して感じたことがいくつかあります。一つ目は、どの分野でも現場の声がもっと広く伝わっていかなければならないなと感じました。現場に関わりを持たない人は知らないことが多すぎます。ですから、伝える必要のあることを伝えるという「伝える側の責務」を痛切に感じました。

二つ目は、「当事者性」の大切さです。人間はこの社会の中で、必ず何がしかの“バックボーン（背景）”を持っています。それは生まれつきがもたらすもの。人生半ばで突然降りかかるもの。経験や出会いから得る場合などなど。そのすべては楽しいことばかりではなく、時には、皆で解決していかなければならない社会の問題や矛盾も含まれます。そういった時の当事者が語る言葉には重みがあり、その人にしか分からない領域があります。だから当事者が語る言葉が、聴く者の心を揺さぶるのだと思いました。

三つ目は、中国新聞「天風録」（2016.8.25）の“オーガストの言葉”を読んで感じたことと、特集タイトルにした「あたりまえ」という言葉に込めた私自身の思いです。それは、異質な存在を遠ざけ、関わらないようにしようとする原因は、相手のありのままの姿である「あたりまえ」を受け入れることができない、私を含めた周囲に原因があるのではないかと取材を通して感じました。

そして相手を理解し共生していくためには、遠ざけて見るのではなく、近づいて、ひとりひとりの「あたりまえ」を、しっかりと見つめることが大切なんだという思いをタイトルに込めました。

最後にこの場を借りて、取材に応じていただいた「からふる吉田」と「くらむぼん」の関係者の方々、そして、作成途中落ち込んだ私を励ましてくれた大切な友人に、感謝とお礼を申し上げます。（原田）

１１月５日（土）１０時から
人権文化祭「ハートフル フェスタ」を開催！

○各種文化活動の発表
○うどんバザー
○焼きそば
○ヤマメの塩焼き
○ポップコーン無料配布
○豪華景品ビンゴ大会！
○３Ｄプリンター体験教室
○陶芸・手芸などの販売
○フリーマーケット
○スマイリー・ドラゴン　ミニ live
○郡山子ども神楽団
などなど　ご来場お待ちしています！

※内容が変更になる場合がありますので、ご了承ください。

特集　ひとり ひとりの「あたりまえ…」

共に生きよう

ひとり ひとりの「あたりまえ…」は、人の価値基準や判断基準など言ってみれば「その人そのもの―」。傷つけて良いはずはないのに、現実は自分の「あたりまえ」でつい他人の「あたりまえ」を傷つけてしまいがちです。障がいのある子ども達の居場所づくりや、集団生活を学べる場所として、スタートした「放課後等デイサービス事業」。この事業が行われている現場の息遣いに耳を澄ませて互いの「あたりまえ」を大切にし互いが「あたりまえ」に暮らすための　共生のヒントを探ります―

（写真上）「からふる吉田」の施設内では、写真のとおりカラフルな下ばきを使っています。均一ではない下ばきが並べられているその光景は、ひとりひとりの個性を尊重していることを象徴しているようにも見えます。また写真の下ばきをよく見ると、同じ色でも使い込まれ方や、履き込まれ方によって微妙に色が違って見えます。人は誰しも自分なりの「色」を持っていて、経験や学びを重ねて自らの色を少しずつ変えたり、色を足して多彩になっていくのかもしれません。そしてそれを「成長」と呼ぶのかも…。
　さて、私の中の「私の色」は今どんな色になっているのか？つい考えてしまいました。

8月3日の蒸し暑い日、合同会社グラース（代表 橋本真理子さん）が運営している児童デイサービス「からふる吉田」を訪れました。夏休みなどの長期の休みになると、小中学生を中心に子ども達が増え、常時10人程の子ども達が利用しています。

1年前、管理責任者の渡邊奈津子さんが「からふる吉田」に関わり始めた頃は、子ども達の衝突でハラハラする場面も多かったとのことです。

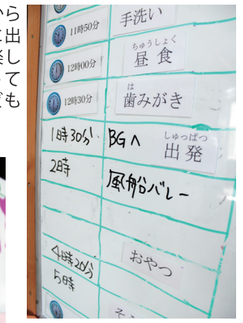
「変化を受け止められない子、言葉で自分の思いをうまく伝えられない子、相手の思いを感じ取ることが苦手な子にとって、集団の中で人と関ることは、私たちが思っている以上に難しいことです」と渡邊さんは話してくれました。「また逆に、感性が繊細で相手を思いやる優しい子、勉強面で特定の科目に得意な子、絵画など芸術面で感性を発揮する子など、個性溢れる子どもも多くいます」と話してくれました。

こうして子ども達の個性を、スタッフが受け止めながら、場面を変えたり、時にはスタッフが思いを代弁したりと試行錯誤の1年を過ごして、現在にいたります。

そして渡邊さんは「衝突も含めて、人と関り合うことが成長のきっかけになる」と言います。さらに渡邊さんは、「スタッフが細心の注意を払い、その子の持つ得意な面を伸ばし、子ども達にとって『ほっ』とできる場所づくりのお手伝いができたらいいな」と話してくれました。

今現在のお気持ちを伺ってみると、開口一番「楽しいですよ、子ども達は毎日色々な顔を見せてくれます。その成長し変化していく姿を間近で感じられることに感謝の一言ですね」と渡邊さん。

寄り添え合える場所で、関わり合い、共に成長する、「共成」。
「共成」し「共生」する―



（写真右）とある日の「からふる吉田」ではB＆Gに出かけて、風船バレーで楽しく遊びました。こうやって予定が書いてあると子ども達は安心します。

（写真左）「からふる吉田」の子どもたちはお絵かきが好き。壁には子どもたちが書いた絵がたくさん飾られています。

～自分の思いで自分の人生を選択して欲しい～

「私が話すことは、私の経験を通した個人的な話です。障がいのある子どもの保護者の気持ちを代表して話す訳ではないので、それを前提にインタビューをお受けします」と久美子さんは、不慣れなインタビューに戸惑いながらも、凛とした表情を私に向けてくれました。

ふゆちゃんが3歳の時、久美子さんは、気持ちが張り裂けそうなくらいピークを迎えていました。当時を振り返って久美子さんは、「彼女のことが見えていなかった」と語ります。

「彼女は知的障がいに加え、少し難聴もあるので、しゃべるのが遅くて、彼女が私に伝える言葉の意味がよく分からなかった。いや、向き合う方法が分からなかったから、分からなかったのかもしれません。毎日、言葉をぶつけられているみたいでした」。

「頑張って外出しても、他の子と違ったことをする、人目が気になり、家に帰ると『連れて行かなければよかった…』と、いつも後悔していました」。

3歳になって療育センターにも通うようになったふゆちゃんは、関わる人が増えて、どんどん心が育っていきます。でも、それを久美子さんに伝える方法を持っていませんでした。

周囲のアドバイスも心に響かないくらい疲れ果てた久美子さんに転機が訪れたのは、ふゆちゃんが自分の気持ちを伝えるために、独自の「手話」を開発した時からだと言います。

「彼女の気持ちが少しずつ理解できて、他人に彼女の気持ちを伝えることができた時、初めて本当に彼女を認められた気がします。そして、嬉しかったです」と話してくれました。

「彼女との関わり方が見えてきて、心が落ち着いてきました。まあ、今でも悩みや不安はあります。でも何かあったら、黙って話を聞いてくれる家族がいて、気持ちを共有できる仲間がいて、お世話になっている『くらむぼん』のスタッフの皆さんや地域の仲間がいて、何よりも成長を感じさせてくれる彼女が頑張っているから…」と周囲の支えがあるから、今があると語ります。

そして、こうも話してくれました。

「一人じゃないから、何があっても大丈夫、これだけは言えます。だって落ちっぱなしの人生なんてないし。

彼女には沢山の経験をしてもらって、心を『太く』育てて欲しい。そして、自分の思いで、自分の人生の選択をして欲しいと思っています」。

「共に歩む人」がいるから
「共に生きて」いける―
あなたの周りにもきっといます。

「よく友だちが『大変な仕事をしてるな』って言います。そんな時ボクは―みんなも、厳しいノルマがある大変な仕事をしているだろ？だから、障がいのある人と関わる仕事が特別に大変だと思うのは違うんじゃないか？って返すようにしています（笑）」

ここ「くらむぼん」は社会福祉法人ひとは福祉会（理事長 寺尾文尚さん）が運営する事業所です。同福祉会は、4年前に制度が成立する10年以上も前から、この事業に取り組んできました。施設長の佐竹正充さんに事業の目的や子ども達との関わりについてお聞きしました。

「ここは障がいのある子ども達にとって、『～しなければならない』という場所ではありません。学校が、がんばる所、家庭が、くつろげる所なら、ここは、仲間と学べる所です。

例えば月曜日におやつのメニューを決める『話し合い』という活動があります。火曜日に材料の買い物に行き、水曜日におやつを作る。子ども達は、集団生活の難しさや楽しさ、地域の方々との関係、生活力、公共マナーを経験から学びます」と佐竹さんは施設の意義を語ります。

有名政治家の障がい者に対する認識不足の発言を例にとりながら、「未だに多くの人は、障がいのある人に対して、何もできないと思いがちです。ですが、彼らに支援は必要であっても、何もできない人たちではありません」と話され、こう続けます。

「そして私は、彼らを一方的に支援する人ではありません。私が彼らから、学び・気づかされることだって多くあります。彼らは自分らしく逞しく生きていて、私たちと同じように、人としての尊厳も、周囲に認められたい気持ちもあります。

だからこそ、地域・人と繋がった環境が、学び・育つ場として必要なのです」と話してくれました。

繋がりを持ち共に育つ「共育」。理解し合い共に生きる「共生」。「共育」と「共生」は繋がっている―

（写真上）利用者一人ひとりに策定される「支援計画書」を見る佐竹施設長。施設の担当者、保護者を交えて丁寧に記載されている支援計画書は、すべて「ふりがな」が振られています。「なぜそこまで？」との問いには、「以前、成人の利用者に自分に読めない書類はただの紙くずと言われまして…。もっともだなと思ってふりがなを振っています」と笑顔で答えてくれました。
　そんな佐竹さんは障がいのある人と関わることを「大変なこと」と捉える周囲の意識に問題があると感じています。障がいのある人と関わることは「ひとりの人間がひとりの人間と関わる、それ以上でもそれ以下でもない」。
　インタビューを通してそう言われている気がしてなりませんでした。

（写真左）この日の「くらむぼん」では子どもたちによるクッキングが行われていました。指導員の方に優しく手を添えられ「できるだけ、できることを増やす」ことも大切です。ちなみにメニューは定番のカレーライス！

（写真左）この日、近くの小学校が登校日でした。真剣な表情でにんじんの皮を剥いている彼は、学校に行っている友だちのために、一生懸命カレーライスを作っていました。このカレーライスが出来上がる頃にはたくさんの仲間が「くらむぼん」にやってきます。